

令和元年5月27日現在

機関番号：34602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K03069

研究課題名(和文)先住民運動にみる主体性の回復：ハワイ人の主権運動と文化活動についての人類学的研究

研究課題名(英文)The Restoration of Subjectivity Seen in Indigenous People's Movement: An Anthropological Study of Hawaiian Sovereignty Movement and Cultural Activities

研究代表者

井上 昭洋 (INOUE, AKIHIRO)

天理大学・国際学部・教授

研究者番号：20271702

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：ハワイ州のオアフ島、ハワイ島、マウイ島、モロカイ島、カウアイ島および米国本土のワシントン州シアトルにおいて、OHA(ハワイ先住民局)での資料収集と聞き取り、幾つかの文化フェスティバルの参与観察・資料収集、環境保護団体が管理するフィッシュポンドでの参与観察・聞き取り、およびハワイ人運動家が実施したデモ行進の参与観察などの調査を行った。

ハワイ人の主権運動は彼らの伝統文化復興運動や環境保護活動と非常に密接に関係しており、彼らにとって政治と文化の問題は分かちがたく絡み合っていることが分かった。また、ハワイ人の「主権」概念は、政治の領域から文化、言語、環境の領域にまで拡張されていることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1980年代以降、先住ハワイ人は伝統文化の復興運動と並んで、先住民の権利の回復を主張し、様々な政治的活動を展開してきた。彼らの要求は、自治組織の設立から、ハワイの独立、ハワイ王国の復活を目指すものまで様々である。本研究は、現在の彼らの政治的・文化的活動について分析することで、先住民問題は単なる政治的権利の問題ではなく、文化的問題でもあることを指摘した点に学術的意義がある。多くの日本人にとってハワイは単なるアメリカの観光地にすぎない。そのハワイで現在進行している先住民の政治的・文化的運動を紹介することで、日本におけるアイヌや沖縄県の問題について新たな視点を提供する点に本研究の社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：I conducted field researches on Oahu, Hawaii, Maui, Molokai and Kauai in the State of Hawaii as well as in Seattle, Washington. I collected document materials and did an interview at OHA (the Office of Hawaiian Affairs), conducted participant observation and interviews at several Hawaiian cultural festivals, a demonstration march in Waikiki and fishponds managed by environmental organizations.

I found that Hawaiian sovereignty movement and their activity of cultural revival and environmental protection are very closely interrelated. I clarified that for Native Hawaiians politics and culture are inseparably entangled. I also found that the Hawaiian concept of sovereignty is now extended from the domain of politics to that of culture, language and environment.

研究分野：文化人類学

キーワード：ハワイ 先住民 ハワイ人 主権運動 文化復興 環境保護

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

米国のネイティブ・アメリカンの政治運動が牽引する形で、北中米、オーストラリア、ニュージーランドなどの入植者国家では、1980年代に先住民運動が盛んになり始めた。1990年代に入ると、グローバルなレベルで国民国家内の“先住民”の存在が喚起されるようになり、先住民運動の影響はアフリカやアジアにまで及ぶようになった。現在、先住民の団体は、先住民権の獲得を目指して国連で活発に活動するなど、国家を超えたグローバルな主体として存在感を増している。

このように先住民の運動はグローバルに進展しているが、なかでも活発な政治運動と文化復興運動で知られているのが先住ハワイ人である。1980年代に勢いを増した彼らの運動は、ハワイ王国転覆100周年を迎える1993年にそのピークを迎え、それ以降、白人保守派からのバックラッシュを受けながらも進展し、現在に至っている。今日では、ハワイ人の政治学者や歴史学者による学術的成果を取り込みつつ、彼ら知識人が加わる形で運動が展開されるようになっている。しかしながら、ネイティブの知識人によって学術的な理論武装がなされているにも関わらず、主権運動はかつて1990年代に期待されていたほどには進展していないというのも事実である。

1990年代に一つの頂点を迎えたハワイ人の主権運動が、四半世紀を経た現在、当時目指していた政治的な目標（自治組織の設置やハワイの独立、王国の復活など、いずれかのレベルにおける主権の回復）の幾ばくかも達成できずにいる。それはなぜか？この素朴な疑問が、本研究の着想に至った理由である。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、現在のハワイ人の主権運動と伝統文化の復興・継承を目指した文化活動を調査することにより、先住民としてのハワイ人がどのように自らのアイデンティティを構築し、主体性を回復しようとしているのかを、その多様性に注意を払いつつ、考察することにある。

主権運動と文化活動は、ポストコロニアルな状況におかれたハワイ人が本来あるべき姿を政治の領域で、また文化の領域で取り戻そうとする活動である。しかし、これらの運動において主張される「先住性」や「主権」概念、発現される「主体性」は、全く同じではない。ハワイ人の政治運動や文化活動を詳細に調査することにより、彼らのアイデンティティや主体性、主権概念がどのように構築されているのかを明らかにすることを目指した。

具体的な目的としては、ハワイ先住民局(OHA: the Office of Hawaiian Affairs)が立案したハワイ人の自治体設立に向けてのキャンペーン(“RISE: BE HEARD - HOOULU LAHUI”)の動向をつがさにフォローし、リアルタイムで現地調査を行うことにより、ハワイ人の主権運動の展開について分析することを目指す。

1990年代に勢力を誇っていた民間の主権運動体が社会的影響力を失いつつある現在、ハワイ人の主権運動家たちはそれぞれ個別に活動している。彼らの抗議活動や集会などを参与観察し、関係者への聞き取りを行うことで、主権運動の現在の有り様を詳細に記述することも目的とした。ところで、ハワイでは伝統文化の復興と継承を目指した大小様々な文化フェスティバルが開催されている。また、環境保全と文化復興を目指した環境保護活動も盛んである。現地におけるそのような文化活動の参与観察を行い、関連資料を収集し、聞き取りを行うことで、文化の領域においてどのようにハワイ人が主体性を獲得していくのかを調べることも目的であった。

### 3. 研究の方法

ハワイ先住民局(OHA)の自治体設立案を検討する代表者会議の開催へ向けての動き、民間の主権運動体の政治集会やデモ、地域社会に密着したハワイ文化フェスティバル、さらには伝統文化に根ざした環境保護運動や聖地保全運動などについて、その概要と実態を把握するために、資料収集、関係者への聞き取り、参与観察など、綿密な現地調査を行った。加えてハワイ先住民局(OHA)、民間の主権運動体、文化復興や環境保全を展開する団体などのホームページからも関連する情報を収集した。ただし、当初調査を予定していたOHAの自治体設立を目指したキャンペーン(“RISE: BE HEARD - HOOULU LAHUI”)は、その素案を扱う会議が頓挫してしまったために、十分な調査をすることはできなかった。一方、ハワイ人主権運動家が計画、実施した抗議活動(Aloha Aina Unity March)については、詳細な参与観察を行い、関連資料を収集して、分析を行った。

### 4. 研究成果

#### (1) 平成27年度

2015年8月5日より20日にかけて、ハワイ州のオアフ島、ハワイ島、マウイ島で現地調査を行った。オアフ島とマウイ島ではEast Maui Taro Festivalの関係者への聞き取りを行い、ハワイ島マウナ・ケア山でTMT(Thirty Meter Telescope)建設反対運動を行うハワイ人活動家に面談した。TMTはマウナ・ケア山の山頂に建設を予定されている口径30メートルの巨大天体望遠鏡であり、ハワイ人にとって聖なる山であるマウナ・ケアを巨大天体望遠鏡の建設から守るために、活動家



図1 マウナ・ケア山の活動家の拠点

たちが仮設家屋と祭壇を設置して数ヶ月にわたり山の中腹で抗議活動を継続していたのである(図1)。また、8月9日にホノルル市ワイキキで行われたAloha Aina Unity Marchの参与観察を行った(図2;図3)。このデモ行進は、TMT建設に反対する若いハワイ人活動家によって企画、実施されたものであり、約1万人、30以上の団体の参加を得て行われた。このデモは、ハワイ島のマウナ・ケア山とマウイ島のハレアカラー山を天文観測施設の建設から守ること、ハワイの自然を水質汚染・大気汚染・遺伝子組み換え作物・農薬散布などの環境問題から守ること、オアフ島のホオピリ農地を住宅開発から守ること、以上三つを目的とし、ハワイ人の伝統的価値観である「アロハ・アーイナ(aloha aina:土地への愛)」を掲げて実施された。さらに、ハワイ先住民局(OHA)の事務所を訪ね、ハワイ人の自治体設立に向けての動きについて聴き取り調査を行った。



図2 TMT建設に反対するハワイ人



図3 ワイキキを行進するハワイ人

以上の現地調査により、ハワイ人の政治運動と文化活動の現状を把握することができた。1970年代にカホオラヴェ島問題がハワイ人の政治運動の起爆剤となったように、2010年代にはマウナ・ケア山の保全活動がハワイ人の運動を結集させる役割を果たしていることが分かった。これは聖地(の保全)が先住民の運動にとって重要な役割を果たしていることを示すものである。しかし、ハワイ人の主権回復に向けての運動は、ハワイ人社会の中で統一された大きなうねりを作り出すことができずにいる。OHA主導の自治体設立に向けてのキャンペーンもハワイ人の間でコンセンサスが得られずに頓挫した。Aloha Aina Unity Marchは聖地や自然環境の保護が前面に押し立てられて実施されたが、一方で、主権回復についての多様な考えにより一致団結できていないハワイ人の活動を集結させることも目的としていたことが見て取れた。

## (2) 平成28年度

2016年4月27日から5月6日にかけて、オアフ島とマウイ島で現地調査を行った。ホノルルのハワイ先住民局(OHA)では各種発行資料を収集し、4月30日にマウイ島ハナ地区で開催されたEast Maui Taro Festivalを参与観察して、関係者から直接的に情報を収集した(図4)。また、5月1日にフェスティバルのプログラムの一つとして行われたツアーに同行し、ハワイ最大のヘイアウ(古代寺院)であるピイラニハレ・ヘイアウを視察し、ハワイ人の遺跡保存活動を確認した。



図4 East Maui Taro Festival

2016年8月9日から18日にかけて、ハワイ島で現地調査を行い、同島に点在する各種博物館において先住ハワイ人やその文化がどのように展示されているか視察した。また、プウコホラ・ヘイアウで13日と14日に開催されたHookuikahi Establishment Day Hawaiian Cultural Festivalの視察を行い(図5)、13日午前6時からフェスティバルに先駆けてプウコホラ・ヘイアウで行われるホオクブ(貢ぎ物)の儀式を参与観察し、その映像を記録した(図6)。



図5 HED Hawaiian Cultural Festival

以上の二度にわたる調査により、ハワイ(ハワイ人)の文化フェスティバルは、ハワイ音楽やフラの発表と鑑賞、伝統工芸の制作体験、ハワイ料理やローカルフードの販売、Tシャツや物産の販売などが、フェスティバルを構成する重要な要素であることが認められた。また、フェスティバルの関係者や州内の住民に加えて、州外からの観光客もハワイ文化を体験すべく参加していることが見て取れた(特に、HED Hawaiian Cultural Festivalにおいては、一般参加者の多くが州外からの観光客であったと思われる)。州の内外を問わず訪れる参加者に対してハワイ文化を提示し、その学びを提供することによって、これらの文化フェスティバルは、ハワイ人とハワイ文化の社会的な可視性や認知度を高めていることが分かった。文化フェスティバルだけでなく、ヘイアウなどの遺跡公園もハワイ文化を可視化しており、それは広い意味でハワイ人による文化の自己表象行為と捉えることができるだろう。しかし、いずれも観光業が深く関わっており、観光という強力な他者の視線にさらされ消費されるという危険性をはらんでいるとも考えられる。



図6 ホオクブの儀式

### (3) 平成 29 年度

2017年9月8日から16日にかけて、ワシントン州シアトルとハワイ州ホノルルで現地調査を行った。ハワイ人の文化フェスティバルについて比較分析の視点を導入すべく、米国本土において開催される同種のフェスティバルである Seattle Live Aloha Hawaiian Festival の参与観察を行い、フェスティバルの関連資料を収集した(図7)。この文化フェスティバルは、シアトル近郊に移住したハワイ人が中心となって企画運営されている。内容は、ハワイで行われる文化フェスティバルと同じく、飲食物や衣料・工芸品のブースが軒を並べ、フラやハワイ音楽のコンサートが催されるというものであった。参加者の多くはハワイにゆかりのある人々と考えられるが、それ以外の人々も参加しているように見受けられた。また、伝統工芸の制作体験、ハワイ語教室、クイズ大会などは、内容的に簡素化・簡易化されているという印象を受けた。このことから、このフェスティバルは、米国本土社会において一エスニック集団であるハワイ人の文化を知らしめることを目的とし、また、故郷を離れて本土に暮らすハワイ出身者(ハワイ人とは限らない)にハワイとの絆を再確認する機会を提供していることが確認できた。



図7 Seattle LAH Festival

### (4) 平成 30 年度

2018年8月27日から9月4日の予定で、モロカイ島およびオアフ島ヘエア地区において保全活動が展開されているフィッシュポンド(伝統的な養魚池)やタロイモ畑の視察、現地関係者への聴き取りなどを行った(図8;図9)。また、9月2日にイオラニ宮殿の敷地で開催された 12th Onipaa Annual Celebration(リリウオカラニ女王の誕生日を祝う行事)のセレモニーやイベントの参与観察を行った(図10)。以上の調査により、ハワイ人の環境保護運動、文化復興運動と主権運動との間に強い関係性があることが確認できた。また、王族にゆかりのある記念日を祝うセレモニーは、ハワイ王国時代を偲ぶ単なるノスタルジックな行事ではなく、今日においてハワイ人の主権を再想像する極めて政治的なメッセージを含んだ行事であることが分かった。



図8 モロカイ島の養魚池保存活動家

2019年2月16日から21日にかけて、カウアイ島において Waimea Town Celebration の参与観察を行った。カウアイ島の王族の歴史について物語るフラを用いた演劇を観ることで、ハワイ諸島には島毎に多様な歴史観があることが分かった。また、カウアイ博物館の見学でハワイ州におけるカウアイ島とニイハウ島の特殊性を確認することができた。さらに、フィッシュポンドや復旧中の遺跡公園(カーネイオロウマ・ヘエアウ)の視察を行い、伝統文化の保存運動がハワイ社会における先住ハワイ人の可視性を高めていることを確認した(図11)。



図9 ヘエア養魚池

### (5) 総括

現在のハワイ人の主権運動において、ハワイ語復興運動とハワイ人学者によるハワイ近代史研究の恩恵を受けた新世代のハワイ人の活動家・運動家が台頭していること、ハワイ近代史観の変化によって「王国」の存在感が増し、主権回復に関する政治的言説が「脱植民地化」から「脱占領化」へ変容していること、「主権」概念を戦略的に拡張することで主権運動の推進が試みられていることが分かった。



図10 Onipaa Annual Celebration

また、ハワイ人の主権運動と聖地・遺跡・自然環境の保護活動との親和性は極めて高く、しばしば同じハワイ人活動家が、政治的な主権運動と文化的な聖地保護運動や環境保護運動という二つの異なる領域で運動を展開していることが認められた。ただし、彼らにとって政治と文化は分断して考えられるべきものではなく、政治的主権の回復と文化的な主権の回復は地続きの問題である。また一方で、文化的な主権の問題については意見を同じくする活動家も、政治的主権の回復については「主権」概念から主権回復の戦略にいたるまで意見を異にすることが多く、個々の活動を一つの大きな運動に統一することができていない。これは、1980年代以降のハワイ人主権運動の抱える古くて新しい問題であると指摘できるが、その要因を明らかにすることが今後の課題である。



図11 カーネイオロウマ遺跡

## 5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

井上昭洋、「Aloha Aina Unity March に見るハワイ人主権運動の現在」、『天理大学人権問題研究室紀要』、査読有、第22号、2019、pp.1-19

〔学会発表〕(計2件)

井上昭洋、「Imagined Sovereignty: A Historical Study of the Hawaiian Political Movement, MO'NA: Our Past Before Us: 22nd Pacific History Association Conference, 2016 (Guam)

井上昭洋、「先住ハワイ人「主権」運動の現在：アロハ・アイナ・ユニティ・マーチを通して考える」、第33回日本オセアニア学会研究大会、2016(神奈川県・三浦市)

〔その他〕

井上昭洋、「ハワイ諸島／火の島、風の島、水の島」、『すばる』、査読無、3月号、2018、pp.201-203

井上昭洋、「ハワイ人の伝統的な生活世界、明治大学理工学研究科建築・都市学専攻総合芸術系シンポジウム「火山めぐみ」」、2017(東京)

井上昭洋、「世界の言語：ハワイ語」、『Clear Sky』(天理大学言語教育研究センター) 査読無、第14号、2016、pp.18-20

井上昭洋、「先住民」の誕生：先住ハワイ人の事例を中心に、平成27年度国際学部公開講座「地域研究への招待：揺らぐ境界線：国家、民族、文化」、2015(奈良・天理市)

井上昭洋、「世界の言語「ハワイ語」」、天理大学言語教育研究センター公開講座「世界の言語」、2015(奈良・天理市)